

真宗文庫

---

浄土真宗とは何か  
— 『教行信証』のころ—

金子大榮



---

東本願寺出版



もくじ

はじめに

第一章 『教行信証』の世界……………15

『教行信証』の組み立て(16) 感の大切さ(17) 永遠無限なるもの(19)  
限りなきいのち(22)

第二章 『教行信証』「総序」のこころ……………25

業縁の歴史(27) 一切を拝んでいく(31) 念仏のちから(33)  
事実から自分を知る(35) 「附記」「総序」の文意訳(37)

第三章 『教行信証』「教巻」のこころ……………39

まことの教(41) 『大経』という言葉(43) 五種類のお経(47)  
未来と本来(48) 道ということ(53) 道と教(54)  
ただ「聞く」一つ(57) 阿弥陀と釈迦(59) ただ「法」を信ずる(61)

正・像・末の三時 (62) 利用と受用 (65) まず人生を問題に (68)

#### 第四章 『教行信証』「行巻」のころ……………71

まことの法 (73) いつでも、どこでも、誰でも (75)

念仏に摂めとる (76) 念仏者の生活 (78) 清沢先生の精神主義 (81)

いつでもしあわせ (84) お浄土とは宝の世界 (85) 生まれる前の世界 (86)

いかに死すべきか (90) 平和をもたらしもの (93) 宗教とは (96)

#### 第五章 『教行信証』の名号六字釈……………99

浄土をねがう心 (100) 人生を語る (102) 何を道連れに (105)

人生の落ち着く先 (107) この道、行く人なし (109) 招かれて歩む (110)

仏法を語る (111) 信心のあるなし (114) 落ち着くところ (116)

#### 第六章 七高僧のお言葉……………119

龍樹菩薩 (120) 念仏と私 (122) なぜ南無阿弥陀仏 (124)

悪業を浄める浄土 (127) 難行の道・易行の道 (128) ヒューマニズム (130)

おのずからな道 (133) 念仏は宗旨をこえて (134) 二通りの手紙 (135)  
あなたの宗教は (137) 念仏に主義なし (140) 開かれている道 (143)

## 第七章 念仏成仏これ真宗

仏教の旗印 (148) お釈迦さまの教団 (150) 諸法無我 (152)  
大乘教の旗印 (154) もちつもたれつ (155) 浄土教の旗印 (156)  
念仏を本と為 (159) お浄土へ往く (160) 宗教を利用する心 (162)  
自然の浄土 (164) 仏の方から決める (165) 迷信の心 (168)

## 第八章 『教行信証』 「信巻」 のところ

親鸞聖人のお心 (172) 教えをいただく (174) 単純なるもの (177)  
念仏する心 (179) 弥陀と釈迦の順序 (180) 宗教とレリージョン (181)  
念仏す、故に我あり (184) ただみ教えをいただく (186) 光景と効験 (190)  
理づめの信仰 (191) 罪福心の根強さ (193) 科学知識も罪福心 (194)  
自力をはなれる (196)

最終章 「真宗」とは——仏教の真宗と教団の真宗——……………

名号を体とす (200) 本願は無我の大悲 (202)

心から、おかげさまと (204) ありがとうの言葉 (206)

二つの真宗 (208) 仏教の真宗 (211) 教団の真宗 (214)

現世利益をはなれて (216) 本筋の仏教 (218) 罪福心をはなれて (220)

真宗の宗風 (222) 教えにより人生を学ぶ (224) 生活にひびく教え (226)

人格的感化 (229) 正しい人間観 (231)

おわりに

## 〈凡例〉

\*本文中の「聖典」とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

\*本書は一九八〇年初版発行の『真宗入門―『教行信証』のころ―』を文庫化したものですが、文庫化に際し東本願寺出版の責任の下、以下のとおり編集を加えました。

・読みやすさを考慮して一部文言を修正、ルビを追加整理し、仮名遣いを現代仮名遣いに統一しました。

・各章で著者が主に取り上げている『教行信証』の本文を章頭に記載し、また項末註を追加しました。





## はじめに

これから「真宗」という題でお話しいたします。まず、なぜこういう題で話すようになったのか、そこから話してみたいと思います。

私には孫がたくさんおります。もう一人前になったのもおりますし、まだ幼年・少年といったのもおります。その孫にいろいろな事を問われたのです。一人は「信ずるといふことは、どういうことですか」と聞いてきました。それは郷里から葉書きをよこしたのですが、まだ何とも返事をしておりません。それは、信心とはどういうものであるか、と聞きたいのであろうと思います。

また一人の孫は「真宗という宗旨しゅうしはどういうことをいうのですか」と聞いてきました。これは簡単には答えておきましたものの、十分とはいえません。まあ長生きをしまして、たいがいの事は思つて、考えても来ましたので、ものを問われて困るといふことはあまりないのです。けれどもあまり身近な、また年

のいかない子どもにこういう大事な問題を問われてみると、はなはだ困ったのです。どのように返事をしたらいいものかと。

こういうことは、「師に代わりて教えていただく」ということがありまして、大事なことは親が教えるのではなく、先生に教えていただくのです。たとえば親が「親に孝行せよ」ということはいえない。それは先生から教えてもらわなくてはならない、ということなのです。このように、人間がこうしていかななくてはならないというような大事なことは、先生に教えていただくのが道ではないかと思うのです。

一方、いわゆる不良少年が多いとか、少年犯罪が起ころんということは、家庭教育がいきとどかないからだといわれておりますけれども、それはどういふものでしょうか。

そこには家庭教育とはどんなものかという問題があると思います。もしその教育というものが知識を授けることであるならば、今日は私たちの時よりは、むしろいきとどいているように思うのです。何せ学校では宿題というものを出

しますが、その宿題を教えてやるのはたいていパパやママですからね。だから家庭教育というものがそういうものであるならば、いきとどかないどころか、今日ほどいきとどいてる時代はないのではないかと思えます。

そうしますと、家庭教育というのは知識を授けることではない。これは人間の道徳とか、あるいはもう少し根本的な宗教精神とかいうようなものであるに違いありません。ところが、それは今申しましたように、親では言葉として教えることはできません。親はただ心で念じ、行いで示すより他ないのです。

「心で教えるはもと、身で教えるはあと」となり。これは教師でも親でも同じことですが、特に親としては心得ておかねばならないことです。教えというものは、心で教えることが根本である。心で教えるということは、心で念ずることであって、立派な人間になって欲しい、まじめな生活を送って欲しいという、その親ごころというもの、それが根本である。身の教えとは、体でみせるということ。それをあとという。そのあとは前後のあとではありません。足跡のあとです。行跡と申しますか、つまりこうするものだと思

ことである。この身で示すということ、これが大事なことなのです。

たとえば宗教の場合におきましても、親たちが朝晩お内仏ないぶつで手を合わせますと、子どもたちに向かってお詣りまいせよといわずとも、いつの間にかそうするのです。それを強しいて言葉で教えることになる、逆効果になることが多いのです。といっても、教える者がなければ、真実にその道を知ることでもないでしょう。その道を言葉として教えるのが先生であり、教師です。

これはある先生のお話ですが、「何ごとにも行儀のよい子が、新聞を持ってくる時だけは、おとうちゃん、新聞！」といって寝そべります。これは変だともよく考えてみますと、自分が新聞を読む時は、いつも寝そべって読んでいます。それでもう新聞というものは、寝そべって読まねばならんもんだと子どもは考えていたらしい」といわれました。

ややもすれば道徳的なことは、親にいわれると強しいられるように感じる上に、どんな人でも子どもたちに見られると、「言葉」と「行」おこないとの矛盾があるのでしょう。それが先生に教えられるとなれば、喜んで聞くということにもな

るのです。

こういうことをいろいろと思わずらいまして、一つ思い立ちましたことは、子どもたちの心となり、真宗の教えを聞く道がないかということです。そこで一つ老人が願いを立てたのですが、それは青少年にもわかるように、親鸞聖人の著された『教行信証』きょうぎょうしんしょうについてお話しできないものであろうかということです。

ご承知のように『教行信証』は非常に難しい書物であって、相当の知識人でも力およばずと嘆かれています。しかしながら、すぐれたものはどんな偉い人でもわからないという一面があると同時に、どんな人にもわかるという、そういう一面をもっているのです。だからその容易にわからないというようなものをさしおきまして、これならば仏教にふれたことのない人でもわかる、というようにしてみたい。そして『教行信証』の全文とはいきませんが、要所要所だけでも意識をまじえつつ、お話ししてみたいものだという願いを起こしました。



第一章

『教行信証』

の世界

## 『教行信証』の組み立て

さて、『教行信証』は、まずはじめに「総序」の文、それから「教卷」「行卷」「信卷」「証卷」「真仏土卷」「化身土卷」それに「後序」の文から成り立っており、「信卷」の前に「別序」があります。

それで、私は「教卷」を「教えの卷」といい、「行卷」を「みのりの卷」、「信卷」を「いわれの卷」、「証卷」を「さどりの卷」としてみました。

「教」は「教え」でわかると思います。さて「行」は「法」にしたがうものですから、「行卷」に顕れたお名号はすなわち「みのり」です。また「信心」は本願のいわれを聞くことですから、「信卷」は、「いわれの卷」といいていいでしょう。「証」は「さどり」です。

そして「真仏土卷」ですが、これは「み国の卷」、また「化身土卷」は真実へと導かれる「てびきの卷」ではどうかと思っています。しかしこれはまだ決めるには、もっと考えてみたいと思います。



それにしましても、一番はじめに序文というものがありますが、それはどうもそう簡単には訳せない。何せ非常に感銘かんめいの深いもので、親鸞聖人のお感じというものを、精いっぱいお出しになったのですから、これだけはもう一字一句どうすることもできません。

「竊ひそかに以おもんれば、難思なんしの弘誓ぐぜいは難度海なんどかいを度どする大船たいせん、無碍むげの光明こうみょうは無明むみょうの闇あんを破はする恵日えいちなり」(「総序」・聖典一四九頁)と、こう説きはじめられて、「聞きくところを慶よろこび、獲うるところを嘆たんずるなり」と結んであります。ただこれを朗読し、拜聴はいちようして、そしてつきないお心持ちに参加するより他ないので。

そういうことを念頭ねんとうにおきながら、「真宗」の話はなしを聞いていただきたいと思おもいます。

## 感かんの大切たいせつさ

これは『教行信証』にかぎったことではないかもしれませんが、広く仏教の

書物を読み、今この序文を読んで思いますことは、およそ私たちの考えなくてはならないものは、「自然」あるいは「大」の字をつけて「大自然」と申しませんが、その広大にして永遠なる無限の宇宙というものです。この永遠無限という言葉のもっている感情内容は、大自然から得たに違いありません。だからその自然というものに対する感情のない人には、おそらく永遠無限という言葉のもっている感情内容というものは出てこないのではないかと思うのです。

以前テレビを見ていましたら、二、三の私の知っている方が「今世こんせと来世らいせ」という題で対談しておられました。それを聞いて私は現代の学者というものは、いかに知識のすぐれているものであるかということを感じたのです。しかし「知」というものには必ず「感」というものがあるのです。「私はこう考える」という言葉は「感がある」ということではないでしょうか。だから知識といっても、その底に「感」がいるようです。そうして、これが「考える」ということの元になっているのではないかと思えます。したがって、その感を抜いてもものを知ろうとしても、それは無理ではないか、今日のもの知りのおっしゃ

ることをみますと、たくさん知っておられるけれども、何か「感」のない「知」だけであるような気がしてならないのです。

宗教の世界は超知識的なものであるといわれ、また次元の高いものであるといわれましても、それを知識的に受け取っているために、立体的なものになっていない。それで知識人には、宗教のことも平面的にしか考えられないのです。しかし、そこに「感」があれば、それがどんな平凡な知識であっても、そこに私たちに何かを思わせるものがあります。その「感」というものなしに「永遠無限」というものをいっても、それは何のことかわからない。

### 永遠無限なるもの

この永遠無限という感情を養うものは、何といっても「自然」というものでしょう。山河を見たり、大海を見たり、星空を仰いだりして永遠無限というものを感ずるのです。これを今日の学問からいいますと、永遠無限というものは

ない。宇宙も滅びることがあるといえます。ですから「感」のないものには、永遠無限という言葉はもう意味をもたなくなっているのかもしれない。

しかし私たちが、人間としてこの世に生を受けたかぎりは、何か人生の背景に永遠無限なるものを感じるのです。それは先に申しましたように、大自然の姿がそれを教えてくれるのです。ことに月の光というものが、何か永遠無限というものを感じさせてくれるのではないのでしょうか。真宗の書物を見ましても、禪の書物を見ましても、必ずその無限というものをあらわす時に、月の譬たとえが出ております。

「わずかなる庭の小草の白露をもとめて宿る秋の夜の月」（『山家集』）と、「ひろくおおきな光にてあれど、尺寸の水にやどり、全月も弥天みてんも、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる」（『正法眼蔵』）と、そこに我われは永遠無限というものを感じるのです。

このように永遠無限というものは、すべてをその内に包み、そしてすべてのものの内にその姿をあらわす。だが限らない限りないといって、限りあるもの

を拒む<sup>こは</sup>ただけではなく、あらゆるものの中に、その限りなき姿をあらわすようなもの、それが無限でなくてはならない。

さて、先のテレビ対談「今世と来世」の話にもどりますが、今世と来世という話を聞きました、「来世といいましても、結局、私たちが生まれぬ先の世界である」ということを思いました。

来世というのは、私たちの人生を裏づけるもの、すなわち人間世界というものがそれによって成り立つもの——たとえば昼の世界というものがあって、それを裏づける夜の世界というものがあのように、そして、その夜の世界は案外、昼の世界を包んでいるといったようなものでしょう。寂光<sup>じやくこう</sup>という言葉があります、その寂光に照らされているところの背後の世界、それが表に出てくると、後世<sup>ごせ</sup>とか、次の世、あるいは来世ともいえるのではないのでしょうか。

ともあれ、そういうことにおいて、人間はこの大自然というものと、自分というものとの関係を、深く感ぜずにはいられません。そして敬虔<sup>けいけん</sup>感情と私はいつも申しませんが、その敬虔感情というものは、まずここから生まれてくるもの

でしよう。大地にひざまずいて、そして手を合わせる心、そういった敬虔感情というものは、大自然を背景として、そしてそこに自分の生というものを見出した時に、おのずから養われるものであるに違いありません。とすれば、親鸞聖人がここで「難思の弘誓は難度海を度する大船」と申されたことも、この永遠無限なるものを、自分をふくめて人生の上感じられたものに他ならないのでしよう。難度海なんどかいの人生において感じられる永遠無限なるもの、それが如来の本願というものです。

限りなきいのち、

私はこの願いというものを明らかにする前に、いのちというものをここで考えてみたいと思います。「正信偈しょうしんげ」のはじめに「帰命無量寿如来きみょうむりょうじゆにょらい 南無不可思議光なむふかしぎこう」と出てきます。あの量りなきいのち、というものは、どこに感じられるかという、この永遠無限なるそこからくるのです。たとえ朝咲いて夜散る花

であつても、その中には無限のいのちがある。その限りなきいのちによつて、そこに花が咲いているのである。だから、たとえ今日一日のいのちではあつても、その内側にはつきぬいのちというものを感じるのです。

永遠無限なるその大なる力は、それが我われの生のよつて立つところの本当のいのちです。そして、それを内感せしめるものは、日月の光です。したがつて、仏の智慧ちえというものも、「無碍むげの光明こうみょうは無明むみょうの闇あんを破はする恵日えにちなり」〔総序・聖典一四九頁〕と受容されたのです。こつとして、光といのちという二つを、まず大自然の内外から感じとつてきたものに違いなと思つたのです。

いのちに光なくば、それは慈悲じひではないでしょう。無量寿ということとは、光あるいのちということであり、いのちに光があるからこそ、慈悲と感ぜられるのです。

大自然の力というものは、人間のためになるものか、人間のためにならないものかはわからんと、そういうこともいえませんが、敬虔感情をもっている人、念仏する者はそうは考えません。すべて自分を育ててくれるところの慈悲の内

であると感じられるのです。それは光を見出した姿でしょう。ですから、生きるいのち、に光を感じられる時、慈悲が慈悲として私自身に素直にうなずけるのであり、また逆に光にいのちがなければ、それは本当の智慧とはならないでしょう。

今日、知識といいますものも一つの光であるかもしれませんが。けれどもそこにいのちがないならば、それを智慧の光ということはできないのです。このように光といのち、というものを、大自然を背景として感じたところに、願いというものが出てくる。それが仏の願いであり、その願いのはたらきが私たちの上にあらわれて、いのちと光とになるのである。ここに宗教というものの根本的な立場があると思うのです。